

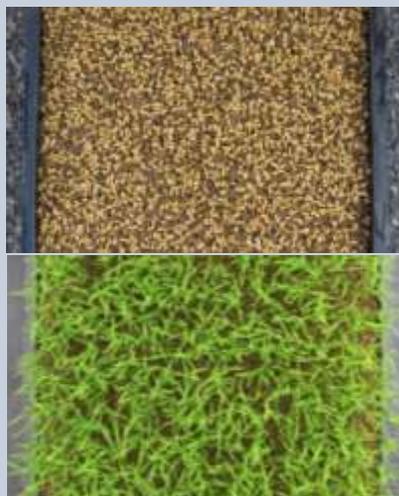


写真：密播苗の田植え

密播苗



標準苗



水稲密播疎植栽培とは

育苗箱に通常の2倍の種籾をまき（密播）、株間を25～30cmで植付ける（疎植）栽培法です。

これにより育苗箱を1/3に減らすことができ、空いた育苗ハウスを他の用途に利用できたり、苗作りから移植までの作業が軽労化できるなどの効果が期待されています。

「水稲密播疎植栽培での品種・標高別栽植密度の指標を策定（3ページ参照）」

成果情報

良食味で種子が少ない晩生カンキツ「瑞季」が品種登録

果樹研究部

カンキツは、4月以降の出荷量が少なく端境期となります。4月中旬が成熟期の「瑞季(みずき)」を京都大学と共同で育成し、令和元年11月20日に品種登録されました(第27604号)。

種子親は「水晶文旦」、花粉親は「サザンイエロー」です。着果性が良く、かきょう病の発生も少ない品種です(図1)。果実は洋梨形～短卵形で甘い芳香があり、ブントンの爽やかな食味を有しています(図2)。糖酸比が高く食味は良好です。果実重は500g程度の大果で種子は極めて少なく、果肉が柔らかくカットフルーツに適しています。

果汁が多く、瑞々しい新緑の季節に成熟することから、この品種名としました。

本研究の一部は、農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業で実施しました。



図1 着果状況

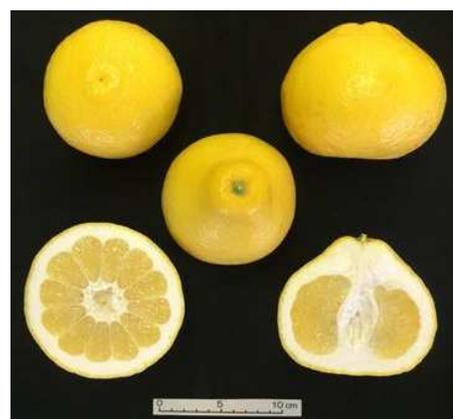


図2 果実

成果情報

竹チップ混合肥料は葉菜類に利用可能

生産環境研究部

近年、放置竹林の拡大や、農業集落排水汚泥の余剰が問題化しています。これらの有効利用のため、企業・大学が共同で高温好気発酵技術を用いた減容化装置を開発し、竹チップ混合肥料(以下、混合肥料)を作出しました(図1)。この混合肥料が作物栽培に利用可能であるかを、コマツナを用いて検証しました。

化学肥料のみの施用と化学肥料と混合肥料を半量ずつの施用でコマツナの生育を比較したところ、同等の収量が得られました。また、双方とも発芽率は97%以上で、混合肥料による生育障害も見られませんでした(図2)。以上のことから、混合肥料は葉菜類の栽培に利用可能であることが分かりました。

本研究は、NPO 法人広島循環型社会推進機構の研究開発事業で実施しました。



図1 減容化装置と竹チップ混合肥料(左下)

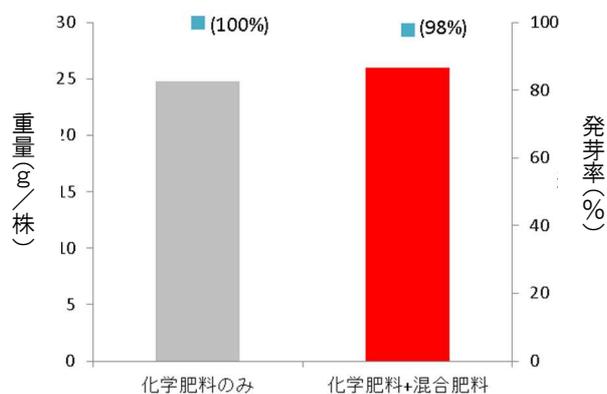


図2 コマツナ1株当たりの重量と発芽率

成果情報

トマト栽培における誘引装置による省力化技術

栽培技術研究部

トマト栽培では、長く伸びた茎を一株毎に下げるための誘引作業を行います。従来は一株毎の手作業で、長時間を要していました。

そこで、当センターは多数の株で一斉に下げることができる誘引装置を製作しました。本装置は、畝の上部に誘引紐を巻きつけた鉄パイプを配したもので(図1)、鉄パイプの端に取り付けたハンドルを回すことで誘引紐が繰り出され、トマトの茎が一斉に下がる仕組みとなっています。

本装置の使用により、多数の株で同時に誘引できるので、作業時間は半減しました。また、株を手で支える必要がないため、腕等への負荷も軽減されました。本装置は42.4万/10aと低コスト。自家施工も可能で、既存施設への導入も容易です。



図1 誘引装置を使用したトマト栽培状況

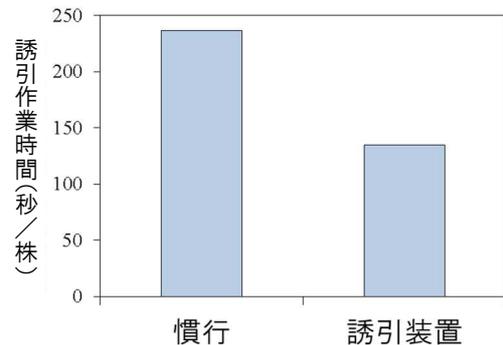


図2 誘引方法による誘引作業時間の比較

成果情報

水稲密播疎植栽培での品種・標高別栽植密度の指標を策定

栽培技術研究部

密播疎植栽培は、10a 当りに必要な育苗箱数を5箱程度まで減らすことができます(慣行では16箱)。

密播疎植栽培での栽植密度は表のとおりで、本県主要品種の標高別に指標を策定しました。この指標に基づいて栽培することで収量、品質、食味が慣行栽培と変わらないことを確認しました。

密播疎植栽培の主な留意点は次のとおりです。

- 田植え時には欠株が発生しないように、丁寧な代かきをし、田植えは完全落水で実施する。
- 茎数が最も多くなる時期が慣行栽培よりも遅いので、中干しは十分な茎数を確認してから開始する。
- 高標高地や遅植え栽培は穂数不足から、減収しないように、43株/坪以上の植付とする。

表 密播疎植栽培での品種・標高別の栽植密度指標

品種名	標高 (m)	栽植密度 (株/坪)	株間 (cm)	育苗箱数 (箱/10a)
コシヒカリ	300~500	37~43	26~30	5.0~5.8
	0~300	37	30	5.0
あきろまん	150~350	37	30	5.0
恋の予感	0~150	37	30	5.0

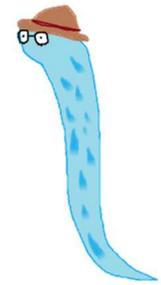
播種量(乾籾換算): 300g/箱、植付本数: 3~4本/株
ヤンマー社製育苗仕様田植機(YR6D)での試験結果



図 疎植(37株/坪)での植付状況

本研究は生研支援センター「革新的技術開発・緊急展開事業(うち地域戦略プロジェクト)」の支援で実施しました。

虫博士の虫のお話



(1) 広島県にいる絶滅危惧種ヒョウモンモドキ



撮影：星野 滋

普段は害虫のことばかりを記事にしているのですが、今日は蝶の話をしていきます。

せら台地(世羅町・三原市)には、絶滅危惧種ヒョウモンモドキが生息しています。かつて、この蝶は福島県以西に分布していましたが、現在ではここだけに生息しています。湧水、水田と畔草(キセルアザミ、タムラソウなど自生)の絶妙なバランスによって生存してきた蝶なので、それら農業環境の変化に伴って、次々に絶滅していきました。

しかし、本種はヒョウモンモドキ保全協議会(ヒョウモンモドキ保護の会、多面的機能支払活動組織、環境団体・NPO、広島市昆虫館、コンサルなどで構成)の活動・努力により、現在では、生息場所も数も増えてきています。

せら夢公園ではヒョウモンモドキを飼育し、幼虫を生息地、採集地や絶滅した生息地へ放飼しています。この美しい絶滅危惧種ヒョウモンモドキについて知りたい方や見たい方は、せら夢公園(0847-25-4400)までお問い合わせ下さい。

(写真・文 生産環境研究部 総括研究員 星野 滋)

ユーストマ(トルコギキョウ) 審査会が開催されました。

令和元年10月21日、当センターにおいて、第65回全日本花卉品種審査会(ユーストマ)が開催されました。

全日本花卉品種審査会は、社団法人日本種苗協会が主催し、花き産地の維持と発展に寄与することを目的としています。

全国から選ばれた公的機関が、地域のニーズに沿った品目、販売品種または育成途上の品種について、実地栽培による比較を行います。優良品種の選定や種苗会社における育種力と採種技術および種子品質の継続的な向上が期待できます。

当センターでは、栽培技術研究部の花き担当研究員が栽培管理を行いました。



農業技術センターNews No.129

令和2年1月17日発行

編集発行 広島県立総合技術研究所

農業技術センター技術支援部

〒739-0151 広島県東広島市八本松町原 6869

TEL: 082-429-0522 (技術支援部)

E-mail: ngcgijutsu@pref.hiroshima.lg.jp